遺跡学研究

日本遺跡学会誌　第1号
2004

第１回大会講演要旨
和田晴吾　「遺跡学の射程」

研究論文
阿部健太郎・内田和伸　「射礼とその復原に関する基礎的研究」
土橋正彦　「奈良市における遺跡をとりまく
環境保全の成果と課題」
藤田英樹　「歴史公園における
デジタル情報活用の理論と方法」
中西裕見子・岡村勝行　「英国における文化遺産研究の理論と実践」
黒崎　直　「遺跡の整備と活用を考える
ーその活用“ソフト”の重要性ー」

研究ノート
渡辺伸行・橋詰清孝　「史跡を地域に活かす
ー神戸市戦国期の山城
環境整備事例ー」
田中保士・深井亮太・玉村幸一・権八實
「明治の砂防堰堤群を活用した
フィールド・ミュージアムづくり
ー福井県今庄町における事例ー」
牛川喜幸・増渕徹　「鴻臚館跡の整備・活用に関する実態調査」

特別寄稿
坪井清足　「遺跡学再論」

日本遺跡学会

ISSN　1349-4031

研究ノート

明治の砂防堰堤群を活用したフィールド・ミュージアムづくり
－福井県今庄町における事例－

田中保士・深井亮太（㈱田中地質コンサルタント（田倉川と暮らしの会事務局））
玉村幸一（*南条町教育委員会）　権八實（田倉川と暮らしの会）

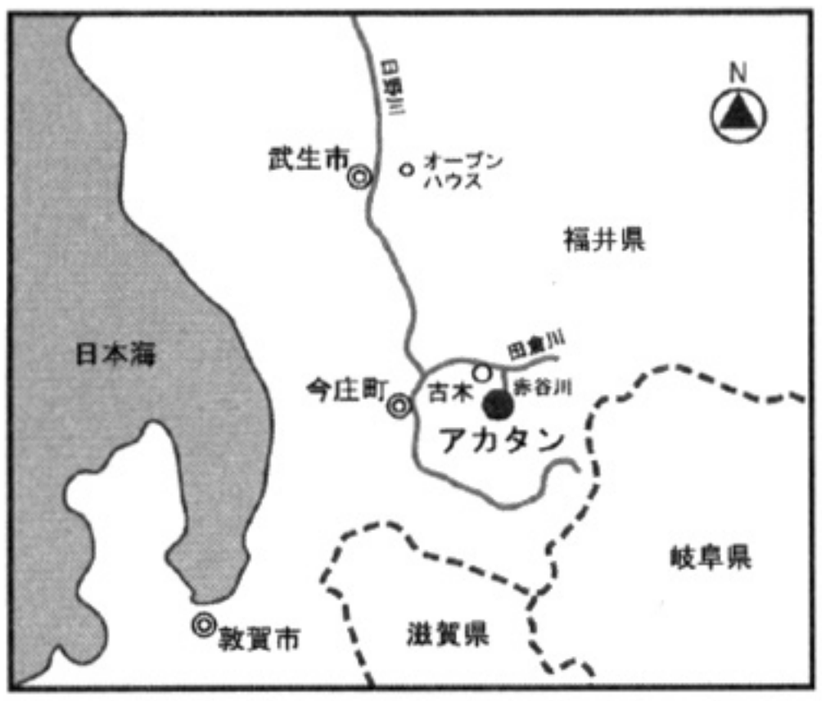
TANAKA Yasushi / FUKAI Ryota / TAMAMURA Koichi / GONPA Minoru

（Association for Living with the Takura River）（*Nanjo Town Board Education）

● アカタン／Akatan　● フィールドミュージアム／Field Museum
● 砂防堰堤／Erosion control dam

1．はじめに

今庄町は福井県のほぼ中央に位置し、岐阜県と滋賀県に接した人口約5,000人、全面積の92%を森林で占める山間の小さな町である。（図－1）



図－1　アカタン位置図

明治28・29年（1895・1896）に2年続きで襲った豪雨により、今庄町古木のアカタン（赤谷）では、奥山大平で地すべりが発生して土石流の災害をもたらし、住民を震撼させた。

それから約100年後、「田倉川と暮らしの会」は、アカタン土石流災害の復旧と防災に取り組んできた先人達の砂防施設遺産を再認識した。住民と都市住民はこの歴史的遺産を現地保全しながら、アカタン砂防フィールド・ミュージアムづくり活動を展開している。また、歴史的砂防遺産を生活防災遺産としてとらえ、自分の集落は自分達で守っていこうという防災意識を啓発している取り組みも紹介する。

2．アカタンの砂防施設遺産

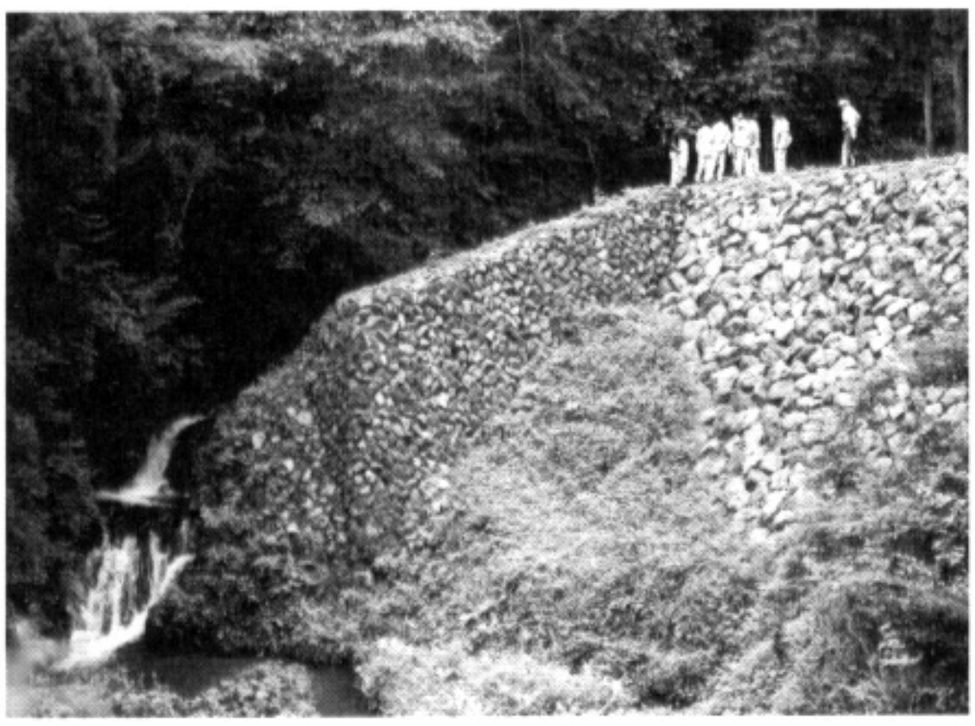
福井県嶺北地域の南端に位置する今庄町は、日野川の上流部を占める山間部に広がっている。日野川を包む東方、南方には1,200m級の越美山地が岐阜県、滋賀県との県境をなしており、西方は700m級の木ノ芽山地が日本海まで続いている。この木ノ芽山地は、福井県にとっては嶺北と嶺南の境界をなしているが、古代、中世を通じて北陸へ通じる街道は木ノ芽が発祥であり、北陸地方にとっても歴史的に重要な意味をもつ山地である。これら三方の山地から大小20程の河川が日野川に注ぎ込んでおり、現在の集落が形成された谷底平野に展開している。いずれも谷幅は狭く、急勾配の河川が多く存在する。数多くの旧河道が過去に水害が多発したことを物語っており、明治以前の水害記録も残っている。濁流に田畑が流され石高が減少し、米の供出ができなくなることもしばしばあったという。

斜度30度以上の急斜面が流域面積の45%を占める険しい山地からなるアカタンでも、同様な被害を被っている。中でも、明治28・29年の度重なる豪雨によって発生した大規模な土砂災害では、大平の地滑りによって流出した多量の土砂が、渓間の田畑を埋め尽くし、田倉川との合流点にまで及んだと記録されている。

この大きな災害を受けて、明治33年より福井県の第一期砂防事業として各種砂防工事が実施された。伝承では1日200～300人がこの工事に就業し、婦女

子は千本付きによる土堰堤の築堤を、男性は石積みの作業を行ったと伝えられている。

100年を経た現在も、2基の土堰堤と7基の石積堰堤、石積堰堤と護床工が階段状に連なる堰堤群が現存しており、その多くは他に類を見ない独特な特徴を有している。水通しは山脚部に設けられており、それに沿って築かれた導水堤によって、通常の流水は堤体を越流しない構造となっている。また、石積みは岐阜県から専門工を呼び寄せたと云われており、「亀甲積み」と呼ばれる工法で、一つの石を中心に、周囲を6個の石で取り囲むように積まれている。さらに、水叩き部に巨礫を敷き詰めることにより、下流洗掘に対処していることや、堤内部に小礫を主体とした透水性の材料を用いて、水圧を低減する構造となっているなど、先人の優れた知識や技術が集結した、砂防施設遺産であると言える。アカタン砂防施設は、今もなお自然環境に調和した独特の美しい景観を見せながら、その役割を果たし続けている。



図－2　岩盤を利用したアカタン砂防 戸の東堰堤

3．得意技を登録した住民と都市住民の交流連携

平成10年（1998）7月、「田倉川と暮らしの会」は、「古木集落の人々は、田倉川と流域の歴史や風俗と深い結びつきをもって生きている。流域の魅力や資源を発掘しよう。」という呼びかけで誕生した。

会の特徴は、地域住民と近隣都市住民が得意技を持って交流連携していることである。得意技は、自己紹介の道具のようなもので、会員交流に効果をもたらしてくれる。たとえば、地域住民である会長のキヨモンさん（住民はほとんど屋号で呼び合っている）は民俗踊りの踊り手名人、ゴンパさんは語り部であり音頭とり名人である。一方の近隣都市住民は、写真・登山・動物・釣り・河川・砂防・土木・森林・地質・農村整備・ダム・歴史・民俗・自動車修理・新聞記者・ラジオ放送記者などの様々な専門的得意技をもっている。得意技の登録は住民が専門的な知識をとり入れることに役立っている。専門家の勤務先は、大学・高専・高校の研究者や教員、管理行政以外の国土交通省・地方行政および民間企業に勤務する技術者などである。

4．独創的な活動プログラム

「田倉川と暮らしの会」が誕生した草創期は、古老からの記憶の収集を進める一方、専門家グループと現地調査を徹底して行ってきた。それらの活動報告や調査の成果などは、「気まぐれ通信・田倉川と暮らしの会」の発行や、リトリートたくら展示交流ホールを借りての会の活動内容展示（ボード8面）によって、地元住民や訪問者に公開した。また、現地から20kmほど離れた武生市の会社事務所内に、オープンハウスを設け、活動案内や展示パネルを並べることで、都市住民への情報発信基地として利用するとともに、活動について気軽に話し合える空間として活用されている。

イベント企画の際は、「残雪恋しタイム＆リバーアドベンチャー」「先人達はどのような情念で・感

図－3　ベースキャンプでの炉端交流会

性で造りあげたか」「炉端シシ鍋座談会」など、好奇心を誘うテーマやプログラムになるよう知恵を出した。

また、「アカタン砂防100周年記念穂高砂防実習バスツアー」として、神通川砂防施設見学、中尾温泉炉端ミニフォーラム、奥飛騨砂防博物館見学および立山カルデラ砂防博物館にて「砂防ミュージアムづくり意見交換会と交流会」を開くなど、県外の関連機関との交流も行ってきた。

学習活動も行っている。「伝統的砂防技術と近代技術の融合」をキーワードにしたフォーラムの開催や、高専学生や工業高校生徒の砂防測量実習、全国の大学生参加のキャンプ砂防を受け入れている。最近では小学生のキャンプ体験のプログラムに「アカタン砂防見学と語り部の交流」が行われるようになってきた。

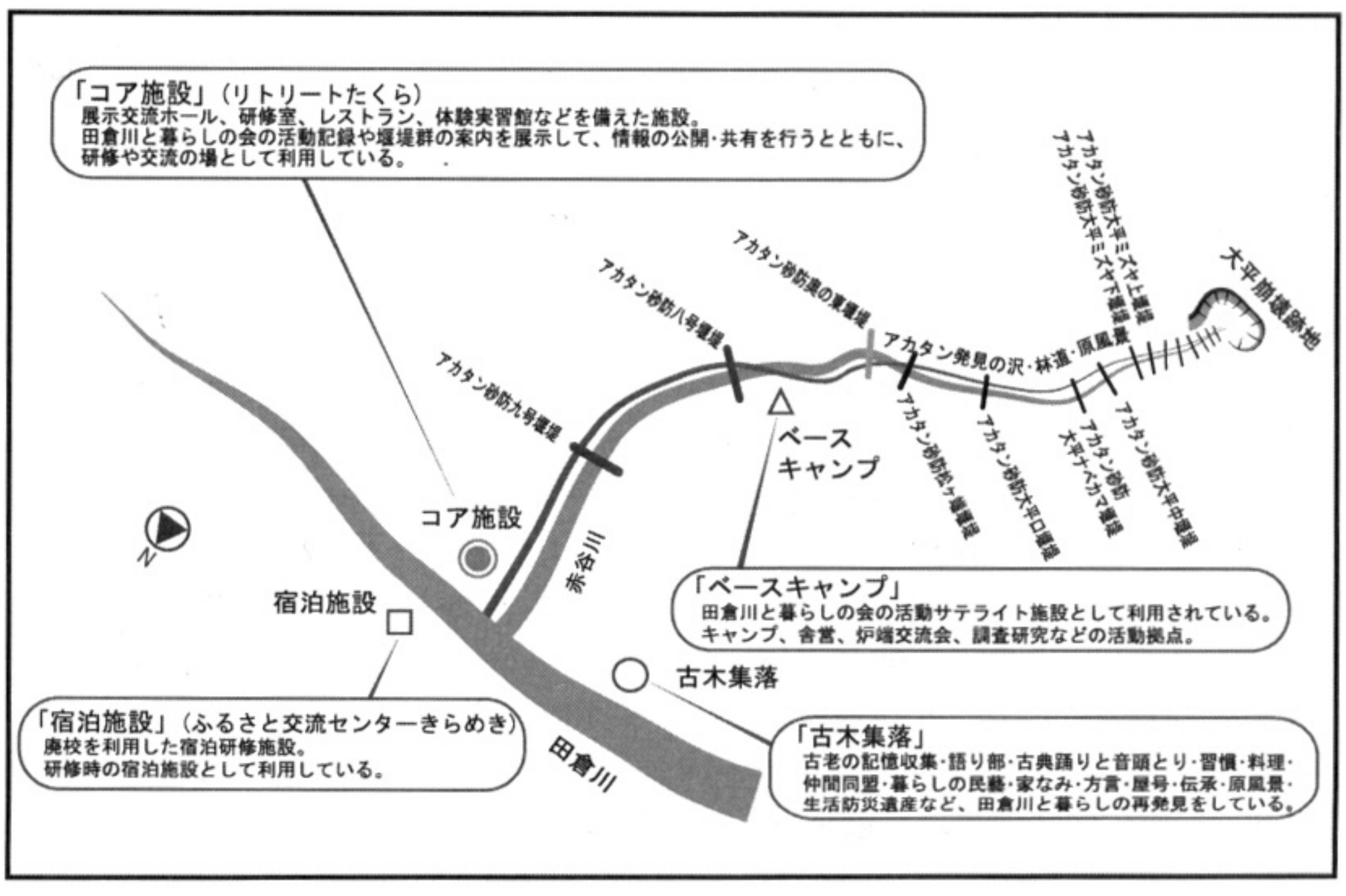
これらの活動がきっかけとなり、平成13年（2001）5月には河川環境管理財団の助成を受けて、冊子「アカタンまるごとミュージアム活動の記録Vol.1」[1]を発行した。その内容は全国大会や各種学会などにも発表してきた[2)3)4)5)]。砂防学会に論文発表も行っている[6)]。

平成13年からは6月の全国土砂災害防止月間を意識した啓発活動も行っている。先人達の砂防施設遺産を、「自分の集落は自分達で守ろう」という生活遺産として捉えた活動である。平成15年の土砂災害防止月間には、「アカタン砂防フィールド・ミュージアム実験オープン」として、はじめて管理行政との協働による「アカタンまるごとミュージアム－住民の暮らしと砂防展－」を開催した。このイベントでは、「アカタン砂防の歴史や暮らしなど一挙展示」と銘打って、「アカタン砂防の歴史」や「土砂災害について」を紹介するパネル展示やビデオ上映を行うともに、「暮らしの民藝展」として、120年前の古木集落の土蔵から見つかった民具等を展示した。また野外でのイベントとしては、「アカタン砂防・トーク＆ウォーク」として、「田倉川と暮らしの会」の語り部と共に散策しながらの砂防見学会を行った。

そのこともあって、同年に「土砂災害に備えた住民避難訓練」が古木集落を会場に行われた。

5．フィールド・ミュージアムづくり

フィールド・ミュージアムが誕生した背景としては、住民自らが地域の有形無形の資産や遺産を発見したことで住民としての存在感や誇りを持ってきた



図－4　フィールド・ミュージアム領域図

こと、また専門家の支援が住民の知識を高めてきたこと、地域住民と近隣都市住民の交流によって、都市の文化的情報を地域特性や地域の民間風俗と融合させ、新たな独自性を画きだしたことが挙げられる。

先人達の遺したアカタン砂防施設は、土砂災害防止、環境の保全に大いに貢献し役立っている。住民はミュージアムをつくり、先人達の自然環境との付き合い方を学び、本来の知識を取り戻しながら暮らしていきたいと考えている。またこの領域には多くの施設があり、これをまるごと有効に活用することで地域の振興に役立つことを考えた。

さらに平成15年より、行政がアカタン砂防堰堤を登録有形文化財に申請するための作業をはじめ、平成16年6月に登録された。

フィールド・ミュージアムの全体像は、図－4に示す領域である。

6．まとめ

これまでの活動の経緯を整理すると、①古老から記憶を収集した。②住民が調査をはじめた。③武生市内にオープンハウスを設けた。④都市住民と学際的専門家を巻き込んだ。⑤早々とフィールド・ミュージアムの実体像をつくり上げた。⑥住民の暮らしと融合した学術的イベントを次々に開催した。⑦活動報告や研究成果を次々に全国に発表公開した。⑧生活遺産として土砂災害防止の学習拠点を狙った。⑨行政に情報を提供した。⑩行政と協働でアカタン砂防フィールド・ミュージアムを実験オープンした。⑪行政は登録有形文化財の申請を行った。

これからは住民主導の活動から行政との連携を基本とした住民参加活動に移行していくと思う。行政の意思決定情報と住民や専門家の情報交換によってお互いがよき協力者としていい関係を持続し、貴重な文化財を保全し活用していきたいと考える。

【補註および参考文献】

1）田倉川と暮らしの会編集 2001 『アカタンまるごとミュージアム活動の記録vol.1』 ドラゴンリバー交流会

2）田中保士 2000 「アカタンから先人達の川と暮らしを探る」 『「川に学ぶ」シンポジウムin近畿』 「川に学ぶ」シンポジウムin近畿実行委員会 pp.284

3）田中保士 「明治の砂防遺構が九つも連なる「アカタンフィールド・ミュージアム」 『河川文化』 第13号 （社）日本河川協会 pp.18-19

4）伊藤喜右ヱ門・田中保士 2002 「住民と都市住民交流連携の社会実験 明治の砂防堰堤群まるごとミュージアムづくり」 『砂防と治水』 第144号 （社）全国治水砂防協会 pp.25-26

5）田中和利 2003 「アカタンまるごとミュージアム－住民の暮らしと砂防展－」 『砂防と治水』 第153号 （社）全国治水砂防協会 pp.60-61

6）田中保士・田中和利・澤田豊明 2001 「歴史的砂防施設をコアとした住民参加によるフィールドミュージアムづくり」 『平成13年度砂防学会研究発表会概要集』 （社）砂防学会 pp.330-331

Abstract:

Erosion control dams built in the Akatan region of Fukui prefecture are still functioning today after 100 years of harmonious coexistence with their natural surroundings. The "Association for Living with the Takura River" ("Takura-kawa to Kurashi no Kai") evaluated the historical and engineering value of the dams by interviewing longtime residents about their construction and conducting professional environmental field surveys (including landscape, local fauna, and other surveys).

The realization of the significant cultural value of these dams encouraged the association to reevaluate the history and customs associated with their catchment area. The association thus created the Akatan Sabo Field Museum through which to conduct information exchange meetings between local residents and residents of nearby communities. This reevaluation of the role of the dams stimulated conservation activities and the initiation of evacuation drills in the event of potential natural disasters such as floods.

In order to conserve and make future use of this important cultural heritage resource more effectively, the Association aims to shift its organizational structure to a resident participation-style of operation by fostering additional cooperation between governments and local residents.